



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小児期のいじめは、神経症傾向と仕事のストレスを介して、成人期のプレゼンティズムに影響を及ぼす [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	橋本, 省吾
Description	配架番号 : 1708
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(医学)
Dissertation Number	乙第7205号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91913
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	HASHIMOTO_Shogo_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士 (医 学) 氏名 橋 本 省 吾

学位論文題名

小児期のいじめは、神経症傾向と仕事のストレスを介して、成人期のプレゼンティズムに影響を及ぼす (Victimization in Childhood Influences Presenteeism in Adulthood via Mediation by Neuroticism and Perceived Job Stressors)

要旨

【背景と目的】 小児期のいじめは、成人期の個人の精神的健康に強く影響を及ぼし、うつ病、不安障害、自殺傾向、および自傷行為を引き起こし、職場での生産性の低下、つまりプレゼンティズムにつながる。病気により労働者が欠勤すること（アブセンティズム）だけでなく、病気による労働者の生産性の低下（プレゼンティズム）は、職場の大きな懸案事項であり、高い社会的コストをもたらす。いじめが神経症傾向と仕事のストレスを介して労働者のプレゼンティズムに影響を与えるという仮説を立てて、共分散構造分析によりこれらの要因間の関連と媒介効果を解析した。

【対象と方法】 人口統計学的データ、小児期いじめ尺度、職業性ストレス簡易調査票（BJSQ）、神経症傾向（EPQ-R 短縮版）および Work Limitations Questionnaire（WLQ、プレゼンティズム）を含む自己記入式の質問紙調査を、2017年4月から2018年4月の間に443名（男性195名、女性248名、平均年齢 40.9 ± 11.8 歳）の成人労働者ボランティアに実施した。変数間の関連は共分散構造分析により解析した。本研究は東京医科大学医学倫理委員会の承認を受けて、被験者の同意を得て実施した。

【結果】 人口統計学的、臨床的、および心理的質問紙のデータとプレゼンティズム（WLQ%生産性損失）との関連について、未婚、現在の精神疾患、および過去の精神疾患の既往は、有意に高いプレゼンティズムと関連していた。小児期のいじめ尺度、EPQ-Rの神経症傾向、およびBJSQの仕事のストレスの各スコアは、プレゼンティズムと正の相関を示した。

プレゼンティズム（WLQ%生産性損失）を従属変数として強制投入法により実施した重回帰分析の結果、プレゼンティズムは、BJSQの仕事のストレス（標準偏回帰係数 β ：0.264）、神経症傾向（ β ：0.225）、現在の精神疾患（ β ：0.099）、および結婚状況（ β ：-0.118）と有意に相関していた。他の6つの独立変数は、プレゼンティズムと統計学的に有意な相関関係を示さなかった。この回帰モデルはプレゼンティズムの変動の21%を説明した。BJSQの仕事のストレスを従属変数として強制投入法により実施した重回帰分析の結果、BJSQの仕事のストレスは、神経症傾向（ β ：0.278）、精神疾患の既往（ β ：-0.143）、教育歴（ β ：-0.131）、および小児期いじめ尺度スコア（ β ：0.103）と有意に相関していた。他の4つの独立変数は、BJSQの仕事のストレスと統計学的に有意な相関関係を示さなかった。この回帰モデルは、BJSQの仕事のストレスの変動の12%を説明した。

神経症傾向を従属変数として強制投入法により実施した重回帰分析の結果、神経症傾向は、年齢（ β ：-0.198）、精神疾患の既往（ β ：0.190）、および小児期いじめ尺度スコア（ β ：0.187）と有意に相関していた。他の4つの独立変数は、神経症傾向と統計的に有意な相関を示さなかった。この回帰モデルは、神経症傾向の変動の14%を説明した。

共分散構造分析の結果では、重回帰分析の結果と一致し、小児期のいじめはプレゼンティズムと直接関連しなかった。神経症傾向と仕事のストレッサーはプレゼンティズムに直接効果（悪化）を示した。しかし、小児期のいじめは2つの経路を通じてプレゼンティズムに有意な間接効果を及ぼした。1つの間接効果は神経症傾向を含み、もう1つの間接効果は神経症傾向と仕事のストレッサーの両方を含んでいた。さらに、仕事のストレッサーを介して神経症傾向がプレゼンティズムに及ぼす間接効果と、神経症傾向を介して小児期のいじめが仕事のストレッサーに及ぼす間接効果が、統計学的に有意であった。このモデルはプレゼンティズムの変動の18%を説明していた。

【考察】 本研究では、小児期のいじめが間接的にプレゼンティズムを増悪し、神経症傾向とそれに続く仕事のストレッサーの増強がその媒介因子であることを示唆している。小児期の有害体験と成人期の労働者のプレゼンティズムの間には非常に長い時間的間隔があるため、これら2つの事象を結び付ける媒介因子があると考えることは合理的である。本研究の結果ははるか昔に発生した事象がどのように個人の現在の状態に影響を与えうるかに関する臨床的疑問への回答となる。

さまざまなパーソナリティ特性の中でも、メンタルヘルスにおける神経症傾向の重要性が明らかになってきた。神経症傾向は、うつ病やその他の主要な精神疾患の確立された危険因子である。神経症傾向は、うつ病における小児期の虐待や低養育の間接効果を媒介する。成人期のプレゼンティズムに対する小児期のいじめの影響において神経症傾向が媒介因子であるというこの研究の結果はこれまでの研究の結果と一致する。

本研究は、小児期のストレスと仕事のストレッサーの間の神経症傾向による媒介効果についてのこれまでの小児期の不適切な養育に関する知見を小児期にいじめを経験した人に広げた。したがって、労働安全衛生研究所（NIOSH）の仕事のストレスモデルでは明示されていないが、労働者の仕事のストレッサーを評価する場合、いじめなどの子供時代のストレスの既往や神経症傾向などのパーソナリティ特性の評価は、プレゼンティズムになりやすい傾向を理解するうえで必須である。

小児期のいじめは職場でのプレゼンティズムを悪化させると推定され、その関連が本研究で明らかになった。国家的観点からは、仕事の生産性を高め、プレゼンティズムを減らすためには、すでに日本ではともに法制化されている、小児期のいじめと職場でのハラスメントに対する対策が必要である。

今回の調査結果は、ヘルスケアのマネジメントおよび職場の管理に新しい視点を提供する。少なくとも日本では、職業性ストレスとプレゼンティズムは職場で発生する主要なヘルスケアの問題である。しかし、仕事のストレスとプレゼンティズムに対する予防と対策には、NIOSHの職業性ストレスのモデルが示すように、労働者の個人要因も考慮する必要がある。本研究は、いくつかの個人的要因の中で、小児期のいじめと神経症傾向がプレゼンティズムに影響を与える重要な要因であることを示した。

【結論】 本研究は、小児期にいじめをうけた経験が成人期のプレゼンティズムの危険因子であり、この効果は神経症傾向と仕事のストレッサーへの悪影響によって媒介されることを示している。これらの結果は、プレゼンティズムの評価および対策の際に、小児期のいじめ、神経症傾向、仕事のストレッサーを含む複数の要因を考慮する必要があることを示唆している。